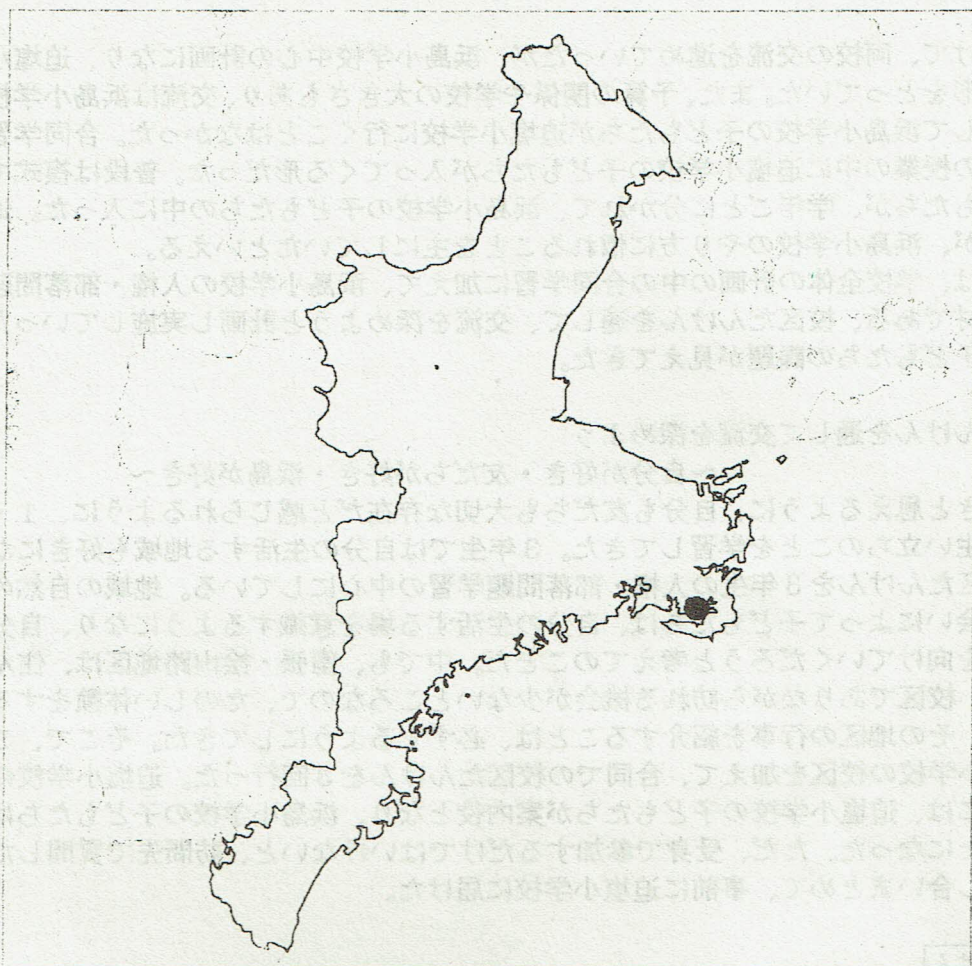


「人数の少ないほうが多いほうに合わせていいんや」
～特別支援教育の視点を普通学級に～



三重県志摩支部

田畑 美代子
(志摩市立浜島小学校)

第一 二編 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

はじめに

浜島小学校は、三重県志摩市、旧浜島町にある。かつて、浜島町には、3つの小学校があったが、2010年度4月に、旧浜島小学校と迫塩小学校が統合されて、新浜島小学校が誕生し、保育所・幼稚園・小学校・中学校がそれぞれ1となった。校区は広く、子どもたちの小学校通学に、スクールバスを利用している。浜島小学校の校区は、浜島地区、桧山路地区、2003年に廃校になった南張小学校の校区であった南張地区、そして迫塩小学校区の、塩屋地区・迫子地区・大崎地区である。

全校児童190名、このうち迫塩小学校区の児童が、21名で、圧倒的に、旧浜島小学校区の子どもの数が多い。今回の統合でも、浜島地区の人々にとっては、学校の場所が変わり、迫塩小学校の子どもたちも、一緒になったという感じであろう。かつての南張小学校が廃校になったとき、今回の迫塩小学校が閉校になったときに、それぞれの地区の方々が感じたものとは、大きな違いがある。

統合に向けて、両校の交流を進めていったが、浜島小学校中心の計画になり、迫塩小学校がそれに合わせる形をとっていた。また、予算の関係や学校の大きさもあり、交流は浜島小学校で行われ、学校全体として浜島小学校の子どもたちが迫塩小学校に行くことはなかった。合同学習のときにも、浜島小学校の授業の中に迫塩小学校の子どもたちが入ってくる形だった。普段は複式で授業を受けている子どもたちが、学年ごとに分かれて、浜島小学校の子どもたちの中に入った。迫塩小学校の子どもたちが、浜島小学校のやり方に慣れることを主にしていたといえる。

3年生では、学校全体の計画の中の合同学習に加えて、浜島小学校の人権・部落問題学習の3年生の中心教材である、校区たんけんを通して、交流を深めようと計画し実施していった。その交流の中から、子どもたちの課題が見えてきた。

1 校区たんけんを通して交流を深めよう

～自分が好き・友だちが好き・浜島が好き～

自分を好きと思えるように、自分も友だちも大切な存在だと感じられるように、1・2年生で家族のことや生い立ちのことを学習してきた。3年生では自分の生活する地域も好きになってもらいたいと、校区たんけんを3年生の人権・部落問題学習の中心にしている。地域の自然のすばらしさや人との出会いによって子どもたちは、自分の生活する場を意識するようになり、自分や友だちの生活にも目を向けていこうと考えてのことだ。中でも、南張・桧山路地区は、住んでいる子どもが少なく、校区でありながら訪れる機会が少ないところなので、たのしい体験をする、人に出会い交流する、その地区の行事を紹介することは、必ずするようにしてきた。そこで、この2つの地区に、迫塩小学校の校区を加えて、合同での校区たんけんを3回行った。迫塩小学校の校区のたんけんするときには、迫塩小学校の子どもたちが案内役となり、浜島小学校の子どもたちは、案内してもらったことになった。ただ、受身で参加するだけではいけないと、訪問先で質問したいことについては、話し合いまとめて、事前に迫塩小学校に届けた。

南張たんけん

南張たんけんするときには、浜島・迫塩両校の子どもたちが、はじめは互いに硬くなっていたのが、イモリを取るようになったら、打ち解けた表情ではしゃいでいた。給食を食べたり、遊んだりして、1日一緒にすごしたことは、子どもたちにとって、互いを見せる機会になった。

また、南張地区の子ども2人にとっては、2人でみんなを案内し、調べたことを発表したことで、自信にもつながった。2人は、事前に家の人に聞くなどして、地区のことを調べ、作文にまとめた。みんなの前で発表するのは、緊張するといながらも、当日は、大きな声で発表でき、地区の人々にも、その姿を見てもらった。みんなを案内する場所に、自分で出かけて、話を聞いて作文を書いた2人に、「南張たんけん、楽しかった。また、イモリをとりたい。」との言葉は、とてもうれしいものだったと思う。そして、その後、はじめて南張へ遊びに行った子もいた。

迫子・塩屋たんけん

地域の人に出会ったことも、初めて知ることがいっぱいだったけど、迫塩小学校に行ったことが、子どもたちの心に一番残った。

・・・ぼくは、3・4年生が、一緒に勉強しているなんて、知りませんでした。最後に、一輪車を見せてくれて、ありがとうございます。ぼくも、ちょっとだけ、乗れるようになりました。

向出先生、アオサ汁を作ってくれて、ありがとうございました。おいしかったです。ぼくは、2はい食べました。いろいろなお話も、聞かせてくれて、ありがとうございました。

・・・みんなと給食を食べたの、おいしかったです。アオサじる、ありがとうございました。

案内をしてもらったこと、一輪車の乗り方を教えてもらったこと、そして、地区の特産物のアオサで作ったお味噌汁をいただいたこと、子どもたちは、地域の方々とともに、迫塩小学校の子どもたちにも、お礼の手紙を書いた。

桧山路たんけん

昨年度の3年生には、桧山路地区の子どもがいなかった。そこで、前年度の区長さんに案内役をお願いし、子どもたちは、訪れる場所と自分の関係を書いた。ここでは、浜島小学校の子どもが作文を読む形で案内をし、質問には前年度の区長さんが中心になって答えてくれた。

・・・わたしは、お兄ちゃんの野球の試合のときに、ここ（ふるさと公園）に来ます。応援をしたり、友だちとあそんだりします。お兄ちゃんは、試合をしたり、練習をしたりします。

ぼくは、3年生になってスポ少の野球に入りました。たまに、ここで練習することがあります。公園には、小さい頃に、家の人とよく来ました。すべりだいで遊んで楽しかったです。

校区たんけん、合同授業と、交流を重ねるにつれ、遠慮や硬さがとれてきて、話をすることも、一緒に遊ぶことも多くなり、言葉もたくさん交わすようになり、浜島小学校の子どもたちの何気ない言葉の中に、子どもたちの課題が見えてきた。

「こやんでもいい」

学校水泳の時には、あとから合流した迫塩小学校の子どもたちに対して、「こやんでもいい。」という言葉が発せられた。実は、プールに先に着いた迫塩小学校の子どもたちは、何度も来れるわけではないので、プールの周りが、どうなっているのか見学していたのだ。気がついたら、浜島小学校が到着していて、すぐに集まってきたのだが、そのときに「おそくなってごめんね。」といった先生の言葉に反応して、「遅れるんやったら、来やんでもいい。」と。一人が口に出したら、続いてふたりが言った。3人にあやまらせて、一緒に水泳をしたが、迫塩小学校の子どもたちは、びっくりしていた。ふだんから、「ごめんね。」「いいよ。気にしないで。」というようなやり取りは少なく、昨年度の反省に「認め合うどころか、けなし合うことが、日常化している実態」とあるように、ただ、「あらい」だけではすまされない言葉の使い方がある。しかも、あとから話を聞けば、特に悪気があって言ったわけではなく、歓迎の言葉を言えず、結果として傷つける言葉がけになってしまっている。南張たんけんの時には、いち早くうちとけて、一緒にイモりとりを楽しんでいたのに、ほかの人が言ったからと、そのまま、まねをする形で、意識しないで相手を傷つける言葉を発してしまってもいた。

「それくらいいつものこと」

迫塩小学校との交流授業、図工の授業の途中で迫塩小学校の子が泣き出した。後から、迫塩小学校の子どもたちから手紙が来て、Aがいやな事を言ったのが原因なので、もうこれから言わないようにしてほしいという。

3年生のみなさんへ

10月27日は、迫塩小学校の友だちと一緒に勉強したり、給食を食べたり、そうじをしてくれて、ありがとう。会うたびに、みんなのやさしいところ、楽しいところ、明るいところ、しっかりしているところを、たくさん見つけて、いつもうれしい気持ちでいっぱいです。

ただ、絵手紙を書いているときに、Aさんが、〇〇さんに、悪口を言ってしまったこと、とても残念でしかたありません。〇〇さんは、ずっと、かなしいきもちでいます。これからは、ぜったいに言わないでください。迫塩小のみんなと、なかよくしてください。12月2日、また会えるのを楽しみにしています。

3・4年担任

田畑先生と3年生のみなさんへ

27日は、いっしょに勉強して楽しかったです。特に、5はんの人にお世話になりました。

それから、一つ言いたいことがあります。それは、絵手紙の時間のときに、〇〇さんに、いやなことを言ったAさん、もう、ぜったい言わないでください。〇〇さんは、とてもかなしそうです。それから、△△さんに悪口を言ったBさん、△△さんは、とてもつらいんです。

ほかの人も、言わないでください。「いかんよ。」と、注意してください。12月2日、楽しみにしています。

手紙にも、具体的にどんなことを言ったのか、書かれていないし、電話でたずねても、本人がはっきり伝えられないという。そのままにしておくことはできないので、学級で迫塩小学校からの手紙を読んで、みんなでそのときのことを思い出していった。Aの周りのにいた子どもたちも、状況を少しずつ思い出し、口にしていった。Aにそのときにどんなことを言ったのかを思い出させた。すると、「なんも言ってないし、『栗に目がある。』って言っただけ。」と、言い、周りの子も、「なんでそんで泣くんや。」と、泣く方が悪いというような言葉が出た。けれど、どんな言い方だったのかも聞いていたら、からかうような口調だった。それを聞いたら、周りの子も、「そんなん、いややわ。」と、言葉というより、言い方が相手を傷つけたということがわかった。Bのことも、やはり言葉というより、言い方だった。声の大きさや、アクセント、イントネーションなどについても練習して、「栗に目がある。」というとき、どんな言い方なら一緒に笑えるか、いやになるか、試してみた。そして、自分たちで慣れてしまっていることでも、慣れてないといやな気持ちになったり、怖くなったりすると言うことを確かめた。周りの子どもたちに、『「いかんよ」と、注意してください。』と、書かれていることもちゃんと考えようと、話し合った。

Aは、「これからは、いやなことを言わない。」と、みんなの前で言い、周りの子も、注意しあうということを確認した。そして話し合ったことを、電話で迫塩小学校の3・4年生の担任に伝え、子どもたちにも伝えてもらった。

「迫塩が、浜島に合わせたらいいんや。」

言葉のことは、前から気になっていたことでもあった。「迫塩の子は、言葉が丁寧。」と、感じている子は、たくさんいた。子どもたちに、丁寧な言葉を使うように呼びかけたところ、「そんなの無理。」とか、「なれてない。」という発言の中に、「迫塩が、浜島に合わせたらいいんや。」というAの言葉が出てきた。自分たちのほうが数が多いのだから、少ない迫塩小学校が合わせればいいという感覚で、自分たちが歩み寄ろうという気持ちも感じられなければ、変えようという気持ちも感じられなかった。「無理」「なれてない」の言葉には、言葉や会話の力が不足していることも見えた。

教室の中を移動するという行為だけで、揉め事が起こる。通りたいところに人がいる時に、「どいて。」と言えず、「どけ。」となり、言われた方が動かず、言い合いになる。消しゴムを落として、拾ってもらった時に、「ありがとう。」でなく、「返せ。」の言葉が出る。場面に応じた言葉の使い方、話し方を教えなければならぬと感じて、技術を身につけるための学習も組んだ。私自身も、普段の生活の中で、ていねいな言葉やありがとうを心がけるようにした。特にAについては、意識した。Aは、きつい言葉には慣れているが、ていねいな言葉には慣れていない。よくない行為をしたときに、ていねいな説明をしていくと、素直に聞いている。

「こんなときどういうの」

ふだんから気になっていた言葉遣いだが、自分の気持ちを素直に表現することが苦手なAにとって、どんな言葉を使えばいいのかわからないという現実もあった。身につけていない部分を補うために、またどんな言葉がうれしいのか、相手の気持ちを知るために、「こんなときどう言うの」という学習を総合的な学習として組んだ。

場面を設定して、どんな言葉を発するのかを考え、発表する。どんな言葉を言われたいか、話し合う。そして、言われた言葉を使う練習をする。という単純なものであるが、こどもたちは、「慣れてない。」と言いながらも、丁寧な言葉、相手を思いやる言葉がけを選んでいく。そして、「こんないわれ方やったら、断られてもうれしい。」という言葉も出てきた。

「こんなときどう言うの」の授業の後、迫塩小の子と一緒に劇を見る機会があった。劇の感想の中に、「迫塩の子と一緒に見ていて、楽しかったです。」というAの感想があった。素直な言葉がなか

なか出せず、誤解も受けやすいAが書いた言葉を、帰りの会で読み、迫塩小学校にも伝えた。「こんなときどういうの」は、場面設定を変えて、何度も繰り返したが、授業の時には、丁寧な言葉で言えるけど、実際の場面ではなかなか言えなかった。

風邪で休んだ子がいたときに、給食のデザートが楽しみなことを、「今日、〇〇休み。ラッキー。」と表現するAだったが、その言葉では、人が休んでいることが嬉しいように思われるということと話したら、Cが休んだときに、「今日も、C休み。Cがおらんとつまらん。」と、口にした。このことを休んでいたCに翌日の予定と一緒に伝えたら、にこにこしていた。

「水泳がんばれよ」

3学期も押し迫った頃に、最後の校区たんけんを行った。浜島東方面、学習センター、幼稚園やB&Gなど、子どもたちの生活に近いところである。このとき、Aが、自分の得意なことを発表して、自信をつけてほしいと思っていた。Aの行動や、言葉に、自分に自信がないために、人を傷つけてしまうのではないかと、素直な言葉が出てこないのではないかと思えるところがあったからである。Aは、スイミングスクールに通い、試合でもいい結果を残しているのだから、水泳のことを作文に書かせた。もちろん本人も、そのことを書くつもりでいたので、自分から進んで書いてきた。

ぼくは、スイミングを習っています。5年ぐらい習っています。ぼくは、B&Gに練習に行きます。夏は、プールはただなので、2日に1回ぐらいは行きます。ぼくは、全国大会のよせんにも行っています。でも、4位で全国大会に出られませんでした。でも、メダルは、15こです。金メダルが3こ、銀メダルが6こ、銅メダルが6こです。プールは、楽しいです。

作文の最後は、試合でとったメダルの自慢で、「なんや4位か。」とか、「全国に出られやんのか。」という言葉も予想していたのだが、まず出てきたのが、「惜しかったなあ。」という声。「来年も水泳がんばれよ。」と声をかけられたら、「うん。もう、申し込みもしてある。」と返事していた。

いつもこんなにいい雰囲気にはならないが、互いにいい気持ちで話し合えた経験は、どこかで残ると信じている。

第3学年「こんなときどう言うの」学習指導案

～総合的な学習 人間関係～

1. 単元名 こんなときどう言うの

2. 目標

- (1) 日常生活の場面に合った言葉を考えることができる。
- (2) 適切な言葉を考え、発する練習を通して、これまでの自分の言葉遣いについてふりかえることができる。
- (3) これまでの自分の言葉遣いの中で、不適切なものについて気づき、かえていこうとする気持ちを持つ。

3. 単元設定の理由

10月末に平田オリザ氏の講演を聞いたとき、「これだ。」と、思ったことがあった。これからの子どもたち(大人もそうだが)に必要なのは、互いに違っているということを前提にした上で、話し合いをし、互いに歩み寄って折り合いを付けていく力、平田氏曰く「社交力」だと。そして今の子どもたちには、対話能力が不足していると。社交力をつけるための有効な手段として平田氏は演劇ワークショップを展開しているということだった。以心伝心とか、阿吽の呼吸と言われたものは、存在しないと考える、一人ひとりが違っているということを前提に、自分の考え・自分のことを言葉を尽くして相手に伝える、同時に相手の事を聞いて一致点を考えなければならない時代に生きているのだという。

最近の新聞報道では、学校での暴力が非常に増えているということを伝えていた。そして、その原因の一つに、自分を言葉で表現することができず、暴力に訴えてしまうことがあると考えられていた。いわゆる切れる状態である。

言わなくても相手が分かってくれると思っただけではいけないのだ。そうした視点で子どもたちを見てみると、やはり、言葉や会話の力が不足していることが見えてくる。教室の中を移動するという行為だけで、揉め事が起こる。通りたいところに人がいる時に、「どいて。」と言えず、「どけ。」となり、言わ

れた方が動かず、言い合いになる。消しゴムを落として、拾ってもらった時に、「ありがとう。」でなく、「返せ。」の言葉が出る。場面に応じた言葉の使い方、話し方を教えなければならないと感じて、この単元を設定した。

4. 指導に当たって

(1) 単元について

単元設定の理由でも述べたが、子どもたちはていねいな言葉を使つての会話が苦手である。また、学習中におしゃべりとして素晴らしい考えを隣の子に話していても、それを発表と言う形にすることはできないことが多い。「今、話していたことをみんなに聞こえるように。」と促しても、黙ってしまう。発表として言葉を選ぼうとすると、言葉が出なくなってしまう。そんな子どもたちには、日常生活の中でよくありそうな場面を想定して、会話を考えさせ、適切な言葉を使う練習をすることが必要だ。そして、子どもたちが、関心を持つためには、その会話が使えそうな場面設定が必要である。

また逆に、日常生活ではなかなかありそうもない場面を創造し、会話を考えることも、言葉や擬似体験を増やしていく目的が必要である。たとえニセモノであっても、会話の練習をすることは、自分を説明することや相手の話を聞くことの幅を広げていくことになる。

(2) 児童について

・・・言い方もだが、言葉が足りなくて相手に伝わらないこともある。また、遊びの場面で多いのが、互いに譲り合わず、いっしょに遊びたいのに遊べなくなってしまう、それ以上に相手をよく思わなくなってしまうこともある。(互いに不満を訴えにくる。) そんな時、中に入って話を聞き出していくと、誤解が解けることが多い。この子どもたちには、会話の練習をし、技術を身につけることが必要である。

(3) 指導について

1学期には、命令口調を変えようと「こんなときどう言うの」をした。何かをしてほしい時、「～ください。」とまで言わなくても、語尾の上げ下げでずいぶん雰囲気が違うことや、してもらった後に、「ありがとう。」をつけることを練習した。(どけ→どいて やれ→して かせ→かして するな→しやんといて) なかなか実際の行動には結びつかないでいるが、きつい言葉を聞いたときに、「もっとやさしく。」とか「ていねいに。」と、声がけすると、言いなおしたり、気づきの表情をしたりする子どもはいる。また、私自身も、普段の生活の中で、ていねいな言葉やありがとうを心がけるようにしている。今回の授業は、その場、その場では話してきたことだが、全体としては話してこなかった遊びの誘いがあったときの返事の仕方を練習したい。まだまだ自分たちで全部の言葉を考えることは難しいことだと思うので、例を示しながら、三択で選んだり、文の中に空きを作りそこをうめていくような方法も取り入れていく。

また、会話の練習をしたあとに、これまでの自分たちの言葉について振り返る時間をとるようにする。

5. 指導計画 (全3時間)

- (1) 会話を考えて練習する・・・1時間 (本時)
- (2) 会話を考え、練習したあとの感想を書く・・・1時間
- (3) ハッピースマイル集会をする (4年生と)・・・1時間

6. 本時の指導

(1) 本時の目標

- ・ 場面に応じた会話を考え、やりとりをすることができる。

(2) 指導過程

学習活動	指導上の留意点
1、鉛筆を借りるとき、貸すときの会話を考えて練習する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 鉛筆を借りたい場面の絵を用意して、吹き出しの中に入れる言葉を考えさせる。 「鉛筆貸して。」 「いいよ。」 ・ 発表のあと、自分が言われたいのを選んで、会話の練習をする。 ・ 2人1組で交代してやる。 ・ 1時間の中で全員に声を出させたいので、全員に発表させる。 ・ ワークシートを用意して、吹き出しの中を考える。
2、遊びに誘われた時の返事の仕方を考え、練習	①同意するとき

<p>する。</p> <p>3、感想を言う</p>	<p>「今日、遊べる？」</p> <p>「いいよ。学校に来て。」</p> <p>発表された中から、自分が言われたいのを選ぶ。その時、選んだ理由も言わせる。</p> <p>②先約があるとき。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 出にくいときのために、3 択を用意する。 <p>「無理」</p> <p>「〇〇と遊ぶ約束をしているから、今日は遊べない。」</p> <p>「〇〇と遊ぶ約束をいっているから、〇〇も一緒に遊ぶよ。」</p> <p>自分が言って欲しいのは、3 つのうちのどれか考えさせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の言葉で吹き出しに書かせて、発表させる。 ・ 出された意見の中から、自分が言われたいのを選び、答える練習をする。 ・ なぜ、それがいいのか、理由も言わせるようにする。 ・ 2人1組で、交代して言い合う。 ・ 会話の練習をしたことの感想を言わせる。 <p>おもしろかった。</p> <p>変な感じがした。</p> <p>いつもと違う。</p>
---------------------------	---

・ 準備物 ワークシート 2種類

(3) 評価

- ・ 吹き出しの中に、書くことができたか。
- ・ 会話の練習を照れずにできたか。

参考文献

- ・ マイソーシャルストーリーブック キャロル・グレイ スペクトラム出版社
- ・ 通常の学級担任が作る個別の指導計画 廣瀬由美子・佐藤克敏 東洋館出版社
- ・ 自閉症の子どもへのコミュニケーション指導 青山新吾 明治図書
- ・ こんなとき どうしたらいい? ハイラー・モーガン・マイルズ 社団法人 日本自閉症協会
- ・ 学校がするソーシャルスキルトレーニング 曾山和彦 明治図書

特別支援教育の視点を普通学級に

「こんなときどういうの」は、ソーシャルスキルトレーニング(以下SST)の方法の一つである。子どもたちの言葉を、どうすれば直していけるのか考えたときに、経験不足・技術の不足を感じたので、「それなら体験させよう。教えよう。」と考え、その方法として、特別支援教育でよく利用されているSSTを利用してみようと、やってみた。効果はあった。3年生のほかに、4年生でもやってみた。この方法で、言葉について考えていくことで、特に、会話の練習をさせていくことで、自分たちの言葉の使い方について、振り返ることができた。その振り返りの作文や言葉を元にして、また学習を進めていくこともできる。

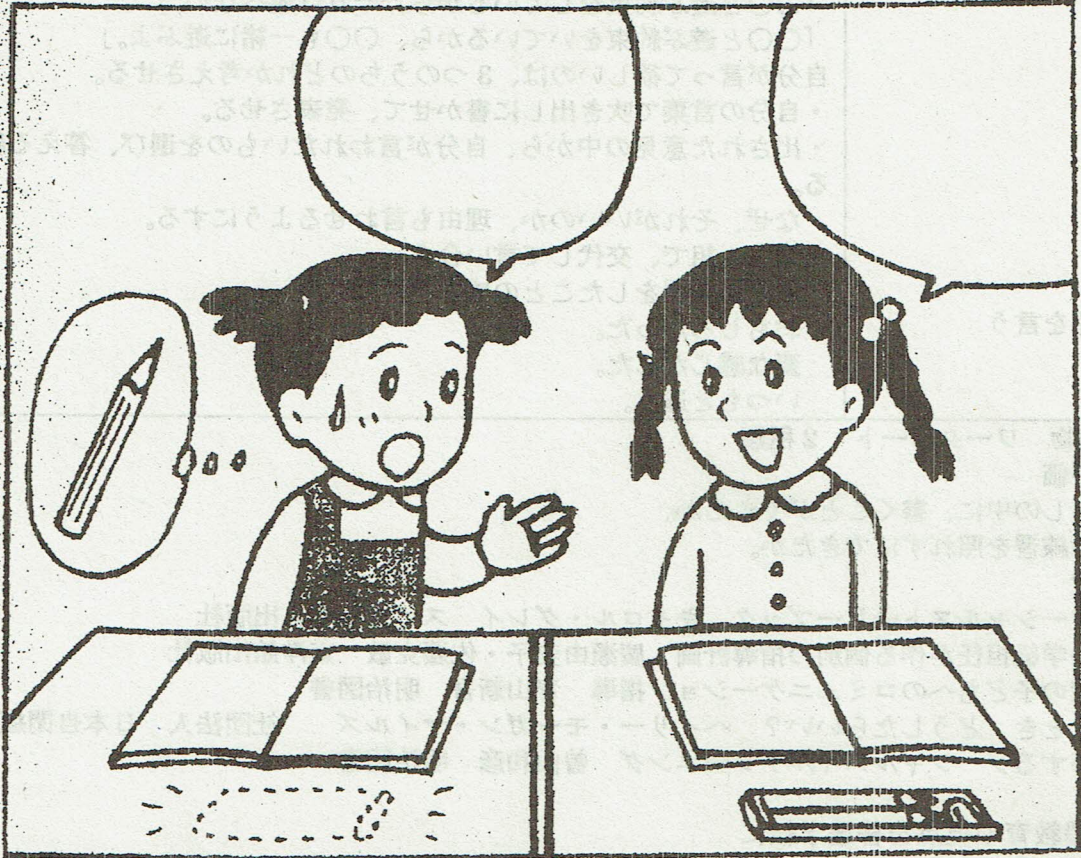
今年度、特別支援学級籍の児童もいる普通学級でも、この方法は利用している。どの子にも、必要な学習であると思っているので、今年は、みんなでSSTをやっている。友だちの家にあそびに行ったときの挨拶の仕方や、掃除のときの注意の仕方などなど、少しずつ回数多く、やっている。

2学期から、市販のワークシートを用いての取り組みを、1・2年生でやっていく。

名前	
----	--

ふきだしに入れる言葉を考えて書きましょう

①



②



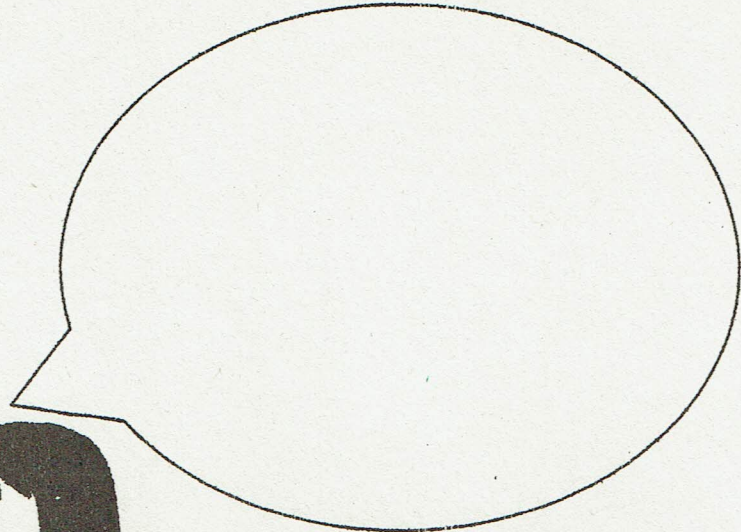
こんなときどう言うの・・・2

名前	
----	--

友だちから遊びにさそわれたとき

① いっしょに遊べるとき

今日、
遊べる？



② 先に、他の子と約束しているとき

今日、
遊べる？

